

# ぐん房総

〒260-0031 千葉県千葉市中央区新千葉2-1 7-6

サンコート新千葉102号

E-mail:kidchiba@illy.ocn.ne.jp

TEL:043-301-7262 FAX:043-301-7263

発行責任者：特定非営利活動法人 子ども劇場千葉県センター

2015年1月10日発行 第75号 1部100円 http://chiba.geki.jou.org/

## 大人は子どもの“今”を真摯に受け止める存在でありたい！

—「子どもの声」から よりよい子育て環境をつくるために社会に発信します—

### ■発信その1

**「私は私のでいい」という自己尊重  
感情が日常的に育つような大人のかかわ  
りと、ほととずる言葉や居場所を子ども  
の周りに用意する。**

人間関係に必要な以上に気を遣い、言いたいことを飲み込み、自分を押しさえている姿が見えます。携帯電話やスマホでのつながりを重要に思っている反面、窮屈さも感じています。修学旅行でどんな班になるか心配したり、LINEラインで外されて理由が分からず不安になったり、子どもたちは、一人ぼっちでいたくない、一人だと思われるのが嫌で気を遣っています。自分がどう見られているのかを案ずる気持ち、自分を出したら嫌われそうで不安な気持ちなど、様々な心構様が見え隠れしています。

失敗体験をする場や機会が少なく自信が持てず、周りの評価が気になって自分か  
が思っていることを自由に出せずにいます。  
チャイルドラインでは、子どもの気持ちに寄り添いじっくりと聴くことで、私は私」と

子ども劇場千葉県センターが開設している「チャイルドライン千葉」は、年間8,500件余の子どもを聴いています。チャイルドラインに届く声には、楽しいことやうれしいことよりも、悲しかったこと、辛いこと、苦しいことなどが多く、大人の都合でつくられた便利な生活や、大人社会の価値観が子どもたちの生きにくさにつながっていること、大人社会の矛盾を突いていることに気づかされます。私たちは、その声を聴いた責任として、また、子どもの代弁者として、子どもを取り巻く社会的な課題を明らかにし、子どもの主体性を尊重したより豊かな環境をつくるために社会に発信します。

### ■発信その2

**多様な人との出会いによる問題の解決  
方法や道の開き方を、子どもも大人も体  
験的に学べる社会にしたい。**

子どもの周りに複数の豊かな大人の存在を感じられない電話が増えています。親でも先生でもない、地域のおじさんおばさんお兄さんお姉さん等の多様な考え方や知恵を感じ育つていく経験が少なくなっています。その上、核家族や少子化のために、必要以上に親の目が届きすぎ、親の期待を裏切りたくない自分と自分を追い込み苦しんでいます。限られた人間関係の中で逃げ場がなく、相談する人も見つからず事態が深刻化していきます。

物事は解決する手立てや道が必ずあるということを、子どもだけでなく大人も体験して学んでいける社会でありたいと思います。

思えるようになったとき、ホッとする声が増えてきます。受け止める存在が身近にあれば、コミュニケーションが苦手と言われる子どもたちも話したい気持ちを持っています。

### ■発信その3

**溢れる性情報の中で正しい知識が不足  
している。年齢に応じた性教育を教育現  
場に取り入れてください。**

見過ごすことのできない背景に性の問題があります。利益優先の社会の中で子どもたちも消費者にされ、正しい知識が不足している上に、興味をそえられる情報が氾濫しています。望まない妊娠で大人になりきれないまま親になる現実もあり、将来の虐待につながる要因にもなってしまいます。性は生、命であることを、彼らはいっ学ぶのでしよう。

### ■発信その4

**新たな課題として6人に1人と言われ  
る子どもの貧困がある。国や地方自治体  
の支援情報や援助を子どもの目線で届け  
てください。**

経済的な困難は子どもを取り巻く環境や未来を大きく変えてしまいます。希望の進路をあきらめるといふ子や、ネグレクトを疑う状況に置かれている子どももいます。入学費用の心配、塾に行きたいけど親に負担をかけられない、時々しかお風呂に入れず不潔だと言われて辛い等、自分の本当の気持ちを言い出せず我慢し、家族や親には心配をかけたくないという思いを持っています。

周りの多くの大人は、その子が困難な状況にいることに気づいていないかも知れません。一人親家庭が増えて制度が整ってきたとはいえ、社会的にも孤立しがちな家庭に、子どもの目線で必要な情報や援助が届いていない現状があります。

衣責(宇野)

2013年度文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果にみる

## どうしても気になる「県内小学校児童間の暴力、不登校児童の大幅増加！」

千葉県内の全公立小中高校で発生した暴力行為の発生件数は、2013年度、前年度に対し、約2割増の3431件で過去最高になった。小・中学校での暴力行為が大幅に増加している。また、小学校の不登校児童も230人増の1086人で過去最多だった」との報道があった。

千葉県教育庁指導課を訪ね、直接詳細情報のヒアリングを行うとともに、子どもと子育ての現場をもつ方たちと編集委員のセッションを開き、今日的な課題をどうとらえ、私たち民間が何をすべきかを探った。

### 文部科学省「問題行動調査」から

千葉県教育庁指導課へのヒアリング 12月19日

#### ■暴力行為■

対教師、生徒間、対教師と生徒間を除く対人、器物損壊など。

特に小学校の児童間暴力が568件にのぼり、千葉県では過去最多となる増加傾向。

#### ■いじめ■

いじめられた児童生徒の立場に立つて、インターネットを通して行われるものも含めて心身の苦痛を感じているものを「いじめ」としている。小学校で全校の70.2%の581校で、からかひや悪口、仲間外れなど、13,884件のいじめがあったが、前年度より減少。中学校では全校の86.6%の331校で6,162件のいじめがあり、前年度より246件の増加。いじめ発見のきっかけは、本人からの訴えよりも、教職員によるアンケート調査などが最も多くなっている。いじめられた児童生徒の相談状況は、学級担任が最も多く、次いで保護者や家族、友人と続くが、誰にも相談していない場合もある。

#### ■不登校■

年間30日以上欠席のうち、病気や経済的理由等による場合を除くものを「不登校」としている。小学校では不安など情緒的混乱、無気力をきっかけとするものが多く、はじめて1,000人を超えて1,086人となった。中学校では無気力によるものが増えている。不登校児童生徒への登校を促す電話や迎え、家庭訪問、家庭や教師による関係改善策、養護教諭やスクールカウンセラーへの相談等を通して、登校できるようになったなど、効果や変化が見受けられる場合もある。

※千葉県内学校数 小学校828校、中学校382校。

県教育委員会は「同じ学校で繰り返し暴力行為が発生したり、同じ児童生徒が複数回暴力に及んだりするケースが多い」「感情コントロールがうまくできない児童が増え、ささいなことで暴力に至ってしまう事案が増加している」と分析している。

一方、小学児童の不登校については、大間関係をうまく構築することができない児童が増えている「家庭の教育力の低下などにより、基本的な生活習慣が身につけていないことが不登校に結びつくケースが増えている」とみている。

これらの対策として、県内に不登校対策推進校125校を指定し、不登校児童生徒支援教室で課題を抱える児童生徒にきめ細かく対応している。また、市町村の教育支援センターや民間施設との連携、スクールカウンセラーを全公立中学校と小学校35校に配置し、保護者からの相談も受けられるようにするなどのサポート体制の充実に取り組んでいる。

暴力やいじめ、不登校などの問題行動は特別な状況によって起こるものとは限らず、身近なところでも発生している。これは、課題を抱える家庭と学校だけで解決策を講ずることができるものではない。家庭が孤立し、学校や担任教師が孤軍奮闘して対応するのではなく、地域社会からの温かい見守りと連携がある環境が、今求められている。

(文責：大森)

### ■関連情報 千葉県子どもの人権懇話会「から

2013年6月「いじめ防止対策推進法」が成立して1年余、全ての学校で「学校いじめ防止基本方針」が策定され、その内容を県教育委員会と現場の中学校から知ることができた。そこでは子どもを真ん中に、子どもの参画も図りながら保護者、学級担任、教科担任、専門家、地域の人等が連携して「予防→早期発見→解決」にあたる具体的な姿が苦労話も交えてリアルに語られた。被害を受けた子どもを守り通すと共に、加害者もいじめから解放されるよう配慮し、いじめが起きてしまったことよって学校や教職員がマイナスの評価を受けないことや、人権教育を行い、子どもたちが主体的に参画することも方向づけられた。

改めて子どもの問題に向かうための「連携」の大切さを感じ、今後各学校での指針を、子どもたちや保護者、地域住民にもわかりやすく伝える工夫が求められる。

## フリースクールの子どもたち

### 親の前でも自分をさらけ出せない苦しさ

フリースクールや外にいて、暴力的な言動をしてしまう子、自己主張の激しい子が、親の前ではおとなしい「よい子」になってしまうという例が多くなってきている。かつては家の外で「よい子」を演じている分、親やフリースクールのスタッフなど本音をだせる相手にストレスをぶつけていたものが、家庭の余裕のなさから親に対して遠慮をしなければならなくなり、自分を出せる場が減っているのではないか。「暴力行為が増えた」という実感はないが「家庭の状況が変わった」ことの影響は実感している、ストレスを発散できる場を持たないまま、日々を過ごさざるを得ない子どもが増えているのではないか。フリースクールにも、色々な意味で余裕のない家庭からの相談は増えており、会費の減免なども含め、どのようにサポートするかが課題となっている。

松島裕之さん

(NPO 法人フリースクール全国ネットワーク 事務局長)

## 子どもや親子の居場所から

ちょっとした事でイライラしている子どもが増えている遊びより勉強・おけいこ事をそれも早くからやらされ、その中でイライラしている子どもが増えている。外からみれば問題をかかえていない家庭で、「荒れているな」と思える子どもがいる。塾に行くために、母親がほっとすべすに子どもを迎えに来ると、手が付けられないほど荒れていた子どもが、「はいっ」と返事をして帰っていく。お母さんに認められたい、お母さんには逆らえないと、感じているようだ。

### 子どもの格差がみえる

夫婦共働きで必死に働いても、今、子どものおもちゃが高く買って買えない家庭がある。ゲームやスマホを持っているかいないかで子どもの格差が見える時代。服装から持ち物から違う。優越感を持ったり、卑屈になったり、残酷な状況がある。

### ストレスがいじめの元に

家庭が財政的に豊かでも、親の期待をしょってストレスをため込んでいる子どもと、食うや食わずでネグレクトの問題を抱えたり、「家にお金が無い」コンプレックスを持っている子どもと、両方ともストレスを抱えている。そこに「学校の成績」「おもしろくない学校」も絡んで、いじめが生まれる。

市川まり子さん (子どもの居場所「ほっとスペース」主宰)

# 子どもの現状を語る

## 幼少期の子ども

地域で子育て中の親子に関わって感じるのは、幼少期の「ゆったりした子どもの時間」を保障する三間（時間・空間・仲間）が子ども社会から減ったことで「ゆっくり考える」「感じる」「やらかしてみる」等、幼少期だからこその体験が減っている。友達の持っているおもちゃは素敵に見え、使いたくなり触れると「あなたのはこっち!」と、子ども同士が取り合いにでもなるものなら「喧嘩してはだめよ、仲良くしましょうね」と、親からの声かけが入る。まっとうなケンカなどには縁なく育ち、正しい答えを効率よく求められがち。自己主張とわがままの境目を遊びながら体験し、受けとめてもらうチャンスも少ない。

子どもらしい当たり前の行動や年齢で通り過ぎる行動【あちこちに興味が跳ぶ、ずーと昆虫などを追いかけて見ている、汚い言葉をわざと言う、野の花を摘む、石や棒を持つ、意にそぐわないと泣きわめき自己主張をする、走り飛び跳ねる等々】が認められにくい。「子どもの出来が親の出来」「普通と呼ばれる枠から外れたくない」「子育てを失敗したくない」「〇才になったのに…」という親の不安が「うちの子大丈夫でしょうか?」という言葉になり、行動や興味が親の考え方や方向づけの影響を受けやすい。

滝口淳子さん

(子ども劇場千葉県センター子育て支援部)

## 障がいをもつ子どもたち

子どもたちは小さい時から分けられている。今子どもたちだけでワイワイ遊べる場所が少ないから、行政が用意した遊び場や親の交流の場に行ったり、〇〇親子教室とか、小さい子を連れていく場所に行くと、専任スタッフなどが見守りとして居て、気になる子の親の不安を聴きながら「ちょっと相談されては?」ということで養育施設を紹介される。そうすると療育をすすめられ早期発見、早期療育となり、ただ元気だけなのに、多動の子になりADHDということで薬を飲まされ、小さい時からずーと薬を飲んでいる子もいる。知的な遅れのない子も教育格差の一番下に持たれていっている。

支援学級に籍があるが、普通学級でも過ごす「交流」の子が増えている。同じ教室に在るのに所属がちがう。支援学級はできない子が行くところという、能力の格差を子どもが見せられている。「やさしくしてあげる賞」とかがあり、上下関係ができていく。多くの人はずうという文化を良いこととして、むしろ特別支援を得られることが良いこと捉え、「子どものため」「そっちにいくと丁寧にみてもらえますよ」というふるいわけをされている。

高村リュウさん

(千葉市地域で生きる会代表)

## 家庭の教育力の低下と いうが…何がおきて いるのだろう

- 親にお金はあつても、子どもを見ていないという家庭の子どもがきびしい。早くからお金を使つておけいこや塾に行かせたりする風潮がある。親はそのためにパートをして塾代を稼ぐ方が優先度が高い。
- 親に認められていない子はみじめ「89点では足りない」98点でも足りない」と言われたりしている。がんばっても自己肯定感が高まつていかない。親は子どもが求めているものを見落としてはいけない。
- 自分は自分でいいんだ」と思わなければ、テストで結果がとれるだけでは自信にならない。家族と一緒にご飯を食べる方がだいじだと思う。
- 両親が忙しいから作業をしながらごはんを食べているとか、宿題もみてやれないから宿題を忘れがちになるとか、子どもたちが家庭のみでは充分できないこともある。
- できない親、忙しい親を責めるようになってはいけない。
- 子どもの養育に関しては、第一義の責任は家庭にあることは確かですが、ここ数年、就労困難、シングルマザーが複数の職場をかけもちしている生活、突然の貧困状態など、新たな課題が山

積していますね。子どもが三度の食事を満足に食べられないなど、豊かな日本、先進国の日本で起きているなんて、あつてはならないこと、考えられないことです。

## 学校の教育力の問題も ある。現場の先生方の さがしさもある

- 家庭的なハンデイがあることで、普通の授業についていけない子どもがいる。分数の割り算が分かれれば次に行けるが、つまずいてしまうと学校に行くにくくなる。いじめも問題だけど、授業がわからない、テストの点がとれない、という子が多い。授業についていけないのは残酷。こんな時、地域毎にお金のかからない塾があればいいなと思う。
- 様々な状況の子どもたちを、学校が引き受けることが困難になっている。だから今は、まず子どもをチェックして分けようとする。学校で福祉的な機能が果たされていない。その子が子どもとしてまともに育つために、いろいろなフォローが必要で、学校だけで無理なら、地域に協力を求めればいい。
- 障がいやハンデイを持つ子どもの扱ひも、ますます切り分けが強まつているように感じます。先生が手がかかると思つたらすぐにチェックして、例えば並んでいられないとか、すぐ暴れるとか、パニックを起こすとかがあれば、保護者に伝えられ、親は精神科などを

受診すると、すぐに診断名がついてくる。入学措置の所管は教育委員会ですが、保護者が一応申込みをし、就学指導（支援）委員会にかけられ、知能テストをされ、やつぱりということになると分けられる。

- 昨年の人権懇話会で「いじめ防止基本条例」づくりに関わった弁護士さんから、各校でつくられる「学校いじめ防止対策委員会」に、管理者の先生だけでなく当事者の担任、教科担任の先生を、子どもに対応できるよう増員してほしい。そして、子どもの人権のことを研修する機会を創つてほしい」と頑張つた、という話を思い出した。
- 先生の忙しさは半端ではないようですね。不登校の対応や措置を例にとると、研修会や研修事例での全教師の共通理解の場をつくる、友人関係を改善するための対応、教師との触れ合う機会を増やす、登校を促すための電話かけや迎えに行くこと、家庭訪問の実施等々。指導や措置という言葉ではあるが、学校としてできる様々な取組をしていて、それらによつて登校できるようになつた」との効果を発表している。

## 大人が、今子どもに起き ていることを注意深く みていこう

- ★ 大人が、子どもに今おきていることを注意してみてほしい。子どもと地域の

おじさん、おばさんが仲良くしていくと思う。学校行事に参加してみると、いじめや体罰のことは感じられるものだ。不登校は「いじめ」「体罰」が原因として多いのではないか。PTAでも子どものことを掴むべき。それをやらないと子どもを守れない。

- ★ 少年事件はガクンと減つている。警察につかまるような犯罪はやらないかわりに、教師いじめ、ネットをつかつたイジメが増えている。大人がつくつた社会環境の負の部分を、子どもたちの行動が敏感に突いていると思う。
- ★ 朝の行きしぶり、せこかが痛い…、なんか変…」というので親はわかりますよ。子どものSOSを感じた時に「子どもがこうなんです、何か変わったことはありませんか？」と聞いてみる。いい先生は飛んできてくれますよ。親は子どもに寄り添つて聴いてみてほしい。意外に放つておかれることが多い。
- ★ 子どもが休み始めるつてことは、もうキレちゃつてつてこと。そうなる前に気づきたい。
- ★ たまたまクラスに手間のかかる子どもがいると、先生がパニックをおこして周りの親も騒ぎはじめ、何であの子がいるのですか？授業がちやんとできないじゃないですか、迷惑だ」という話になつてくることもある。大人や地域社会も立ち止まつて考えなくては、と感じる。

★子どもの問題が起きると、家庭の問題「いや、学校の問題」と、責任を転嫁しがち。少なくとも子どもの育ちにかかわっている家庭は家庭で、学校は学校で、解決しなければいけないことはあるはず。

★貧困などは、私は努力しただけ、あなたは努力していないからだ。だから自業自得」という考え方が、社会の大半を占め、貧困は個人の問題とされがちだった。今起きている貧困の問題は、個人の努力不足だけで起きてきてはいないし、個人の努力で解決できるような単純なことではないことも理解しておきたいですね。本当に複雑な社会背景がある。

**学校以外の子どもの居場所や遊びの場、子ども意見を大切にする社会**

◆教育の問題は政治と切り離せない。国や千葉県・市町村の子どもの教育や文化に関する施策や、世の中の新しい情報を挿んでおきたいですね。

◆子どもの話に耳を傾ける家庭・地域であつたらいいね。子どもや養育者にうんうんそれは大変だったね」と気持ちに寄り添う人が、子どもの周りにいるということ、困ったことがあつたら「一緒に考えよう」と言ってくれる親・先生・まわりの大人・行政の人がいれば、子どもが希望を失うことはないのではないのでしょうか。

◆東日本大震災後、地域の絆の重要性が指摘され、見直そうという空気はある。が、私の町会でも行事をやめたらとか、役員の負担が大きいと、かわり合うことが縮小されがち。でも、一人でもできることはある。ふだんから地域のことに興味を持ち、こゝろにちは」と言える人を増やし、声をかける等できることはやろう！

◆子どもの数が少なく、地域で子どもの声がしないところもある。子どもの声がしない町は、やがてその町も衰退してなくなる」と聞いたことがある。本当にその通りだと思う。子どもの声や存在が「うるさい」ではなく、子どもは地域の未来」となればいい。リタイアして地域に戻っている人や、子育てを終えた人は気をつけねばと思う。

◆フリースクールの存在や支援の必要性が語られる時代になったが、不登校

**文部科学省**  
**「全国フリースクール等フォーラム」での**  
**下村博文文部科学大臣記者会見のコメント**

・・・昨日もフォーラムで三つの団体から事例発表がありまして、フリースクールでは一人一人の子供たちの状況などに応じた多様な活動が行われることについて改めて感じました。子供たちに提供されることが必要な多様な学習環境が提供されることだと思います。

フリースクール等で学ぶ子供たちをどう支援するかについては、昨日のフォーラムの結果などを踏まえ、今後有識者会議を設置し、具体的に検討していくこととしておきます。この有識者会議におきまして、来年の5月から6月頃に中間取りまとめ、そして、来年度末、平成28年3月には最終まとめができるよう、スピーディに検討を進める必要があると思います。

の子どもの「社会復帰」のための機関ととらえられてしまえば、子どもの苦しさは変わらない。学歴、就労への不安、無理にでも働くための準備をしなればというプレッシャーは強くなっている。人間には、自立をしたい、働きたい」という欲求があるはず、プレッシャーをかけて働くことを焦らせるより、その欲求を阻害させる自己否定感を取り除く方が重要だと思う。

◆子どもたちは、不満なことや疑問に感じることがあつても、どうせ変わらないと、自分たちで声を上げ行動を起こすことを諦めてしまう。自分に誇りがもてないというのは、自分が居る場所で、自分の存在や意見・思いが尊重されていないから。子どもの意見表明権は、日常生活のあらゆる場面で大切にされなければならないし、そのことが、子どもの自尊感情を高め、主権者を育てていくことにつながる。

**子ども市民 当事者が社会を変える 戦い挑戦する大人たち**

●大学へ行きたかつたIQ100の子は、社会が苦手だからということ支援級に。支援級の先生は普通高校に行かせた経験もないので、中卒で作業所を紹介された。子どもと話していると辛くなる。教育格差から経済格差、それで社会に放り出される。そうすると能力がない子は異議申し立てもできない。親も闘える人ばかりではない。独りでは戦えない親と共に戦っている。

●子どもたちは学校だけでなく地域でもつながっている。不登校している友達に「たまには学校に来てみたら？」と軽い手紙を書いたらまた学校にくるようになった。地域のクリスマスパーティーにも来たよ」と嬉しそうに話していた。子どもたちに寄り添って一緒に考える地域のおとなのファシリテーターも試されるが、子どもたちがつまみにも期待したい。

●全国フリースクール等フォーラムに関わり、時代が変わってきた」と感じた。下村文相から「学校も変わるべき」とコメントがあつた。フリースクールも声をあげられるようになり、当事者が発信することがあると思う。特別支援学校のやり方も今までのやり方ではいけない。子どもや子どもの現場目線で訴えていくことに挑戦する時期。今後、学校の絶対的な価値感も変わっていくだろう。どこも選ばない生き方もあるかもしれない。



# マララ・ユスフザイさんのノーベル平和賞記念講演



世界中の子どもたちが平等に教育を最優先にうけられるよう行動を起こすべきだと訴えたマララさんのスピーチは、心に響きました。子どもの権利のために一緒に取り組んでいく私たちの背中を押してくれる内容ですので、ここに掲載して、私たちにできることを改めて考えてみたいと思います。

## 支援と愛に感謝

今日は私にとって素晴らしく幸せな日です。みなさんの支援と愛に感謝します。今でも世界中から手紙やカードが届きます。みなさんの言葉に、勇気づけられ、励まされてきました。

最初のパシュトゥン人、パキスタン人として、そして最年少でこの賞をいただくことをとても誇りに思います。

また、サティヤルティさんと賞を分かち合えて光栄です。インド人とパキスタン人が平和のために団結し、子どもの権利のために共に取り組むことができると世界に証明できました。

## 子どもたちへの賞

今回の賞は私だけのものではありません。教育を望みながら忘れ去られたままの子どもたち、平和を望みながら脅かされている子どもたち、変化を求めながら声を上げられない子どもたちへの賞なのです。

私は彼らの権利を守るため、彼らの声を届けるために、ここに来ました。今は、彼らを哀れむときではありません。教育の機会を奪われた子どもたちを目にしなくなるよう、行動を起こすときです。人々は私をいろんなふうに呼ぶのだと知りました。

ある人は、タリバーンに撃たれた少女と。

ある人は、自分の権利のために闘う少女と。

今は、「ノーベル賞受賞者」とも呼ばれます。

私は、ただ、全ての子どもたちが教育を受けられ、男女平等となり、世界中に平和が訪れることを心から望んでいる頑固な人間です。

## 教室の中に未来

未来は教室の中にあつたのです。でも10歳のとき、美しい観光地だった溪谷は、テロが相次ぐ場所になりました。400以上の学校が破壊され、女子は学校に通えなくなりました。

権利であつたはずの教育は罪となりました。私をとりまく世界が突然変わったとき、私の中の優先順位も変わりました。

私には二つの選択肢がありました。一つは何も言わずに、殺されるのを待つこと。二つ目は声を上げ、そして殺されること。私は二つ目を選びました。声を上げようと思ったのです。2012年、テロリストたちは私たちを止めようとし、バスの中で私と友人たちを襲いますが、銃弾では勝てなかった。私たちは生き残り、その日から私たちの声はますます大きくなりました。

私が自分の身に起こったことをお伝えするのは、珍しい話だからではありません。どこにでもある話だからです。

これは、多くの女の子たちの物語なのです。

私は、この物語を共有する仲間たちを連れてきました。パキスタンのシャジャとカイナート・リアズは私と一緒に銃撃されましたが、学ぶことはやめていません。カイナート・スームロは兄弟が殺されるなど過酷な虐待に苦しんでも屈しませんでした。

マララ基金のキャンペーンで出会ったシリアの16歳のメゾンは、ヨルダンの難民キャンプで子どもたちの勉強を助けています。ボコ・ハラムによる拉致事件が起きたナイジェリア北

部から来たアミナは学校に通うことだけを望んでいます。

インドやパキスタンのような多くの国で、サティヤルティさんが言われるように、社会的なタブーのために多くの子どもたちが教育を受ける権利を奪われています。児童労働や女兒の児童婚が強制されています。

同い年の親友は、いつも勇敢で自信に満ちた女の子で、医者になることを夢見ていました。でも、12歳で結婚を強いられ、14歳で男の子を産みました。彼女なら、とてもいいお医者さんになれたでしょう。でも、なれませんでした。女の子だったからです。

だから私はノーベル賞の賞金をマララ基金に使おうと決めました。あらゆる場所の少女に教育を与え、指導者たちに支援を呼びかけるためです。最初に基金が届くのはパキスタン。特にふるさとのスワート溪谷やシャングラです。私の村には中等女子校がありません。友人たちが教育を受け、夢が実現できるようにしたいのです。

## 世界の指導者へ

今は、指導者たちに教育の重要性を認識してほしいと訴える段階ではありません。彼らは既に知っています。彼らの子どもは名門校に通っているのですから。行動を呼びかけるときです。世界の指導者たちが、団結し、教育を最優先するよう求めます。

私たち子どもには分からないことがあります。どうして「強い」といわれる国々は戦争を生み出す力がとてもあるのに、平和をもたらすにはとても非力なの？ なぜ銃を与えるのはとても簡単なのに、本を与えるのはとても難しいの？ 戦車を造るのはとても簡単で、学校を建てるのがとても難しいのはなぜ？

## 夢実現の決意を

私たちは21世紀に生き、不可能なものはないと信じています。月にだって行けるし、もうすぐ火星に着陸できるでしょう。全員が教育を受ける夢も実現すると決意しなくてはなりません。政治家だけでなく、私も、あなたも。これは責務です。待っていてはいけません。私は世界中の子どもたちに呼びかけます。立ち上がりましょう。

空っぽの教室、失われた子ども時代、無駄にされた可能性を目にすることを「最後」にすることを決めた、最初の世代になりましょう。

子ども時代を工場で過ごすのは終わりにしよう。

少女が児童婚を強いられるのは終わりにしよう。

罪のない子どもたちが戦争で命を失うのは終わりにしよう。

教室が空っぽのままなんて終わりにしよう。

こうしたことは、私たちが最後にしよう。

この「終わり」を始めましょう。

そして今すぐここから、ともに「終わり」を始めましょう。

朝日新聞マララさんのノーベル平和賞受賞演説<要旨>・毎日新聞より転載・編集



## 必要性が高い！児童養護施設を巣立つ子どもたちへの支援

はぐくみの杜を支える会

事務局長 久保 貴子

はぐくみの杜を支える会は、2013年9月に開設した児童養護施設「生活クラブ風の村はぐくみの杜君津」の支援団体として、施設より少し早い2013年4月に発足した団体です。

何らかの理由で親や親せきと暮らすことができずに、児童養護施設で暮らしている子どもたちは、全国で約3万人。千葉県では800人を超えています。

かつての児童養護施設は、戦災孤児を保護するいわゆる「孤児院」でしたが、現在施設に暮らす子どもたちの8割は片親もしくは両親がいます。しかし、虐待や親の精神疾患などにより、一緒に暮らすことが好ましくない状況のため、施設での暮らしを余儀なくされています。とは言え、施設に暮らす間は十分ではないにしろ法律に守られています。18歳（措置延長で20歳まで）または15歳（中学校卒業後、高校に進学しない場合）で施設退所する子どもたちに法の後ろ盾はありません。その後の進学やサポートする体制も、不十分です。施設に暮らす子どもたちの支援はもちろん必要ですが、施設を退所

する子どもたちへの支援は、その後彼らが人生を歩んでいく上でも必要性が高いものとなっています。

全国児童養護施設協議会の「平成17年度児童養護施設入所児童の進路に関する調査報告書」によれば、中学卒業1,703人中、就職者158人(9.3% 全国平均0.6%)、高校卒業生840人中、就職者651人(75.1% 全国平均17.4%)という実態があります。

大学進学率(4年制、短大、高等専門学校)は、2004年には9.3%。全国平均は47.3%(2004年学校基本調査)に比べて、約1/5程度です。金銭的な事情で、学力がありながら進学できない子どもたちも多くいます。

施設に暮らす子どもたちが、自分の夢をあきらめることなく目指す道に進めるよう、金銭的、物的、人的な支援が必要です。

すべての子どもが、その能力に応じて進みたい道に進んでいけるよう、この活動を通じて知り合ったおおぜいの人と、一緒に考えていきたいと思えます。

## 私からのメッセージ



### 高学年の子どもたちに見ごたえのある舞台を届けたい！

こどものあしたプロジェクト

代表 黒木 裕子

“劇場”の規模が小さくなり、高学年や中高生のための見ごたえのある舞台上演が少なくなっていた中、2006年にNPO佐倉こどもステーションのメンバーのひとりがミュージカル「はだしのゲン」(木山事務所)に出会いました。「すごい舞台！人生について考え始める思春期の子ども達になんとかしてこの作品を届けたい！」その一途な思いに共感した佐倉の“馬鹿者”達(劇場のOG他)が200万円以上の公演料に打ち勝つ蛮勇を持って動き出し、「こどものあしたプロジェクト」が始まりました。

佐倉での大舞台は久しぶりで珍しさもあって公演は成功裡に終わりました！しかし他方では「ゲン」を心底観たかった子が経済的事情で観られなかった、という厳しい現実にも直面することになったのです。

当時子どもの貧困は7人にひとり、そうした中、子どもや家庭への割引価格を実施するだけでは不十分ではないか？家庭の経済的事情で子どもの願いが挫折することがあってはならないのでは、と議論を重ね、2年後の2008年から「ひとり親家庭招待事業」

を開始しました。2014年の今はリピーターの方も増えて、会場で挨拶を頂いたり、すぐに感想を送ってくださったりで、この事業を続ける大きな励みになっています。

そして、2015年は8年目。作品は劇団青年座の大型作品「ブンナよ木からおりてこい」(7/5(日)佐倉市民音楽ホール)に決定。年1回の公演ながら、財源の無い貧乏所帯は知恵と体力のみで勝負です。

1. おとなのチケットに100円の寄付を上乘せさせていただきます
2. 協賛金を40万以上集める
3. 600席を売り切る

を全部やりきってやっと赤字を免れる、相も変わらず厳しい状況ですが、NPO佐倉こどもステーションを始め、地域、近隣の文化団体や頼もしい推進者そして応援者とともに今年もまた茨の道を前進していきます。子ども達と一緒に観に来てくださることが一番の応援になります、どうぞよろしく願いいたします！

## 子どもの創造表現フェスティバル2014～ぼくらの夢ステージ～

「子どもの創造表現フェスティバル」は、八千代市の市民文化祭の一環として行われ、ステージの上で子どもたちが自由にいきいきと自分を表現する「子どもたちの文化祭」です。出演者をはじめとして、ステージを運営進行する裏方までの全てを、子どもたちが主体的に関わります。

日時：2014年11月9日(日)13:00  
場所：八千代市市民会館小ホール  
出演者数：12組 143名 観客数：350名  
子ども制作スタッフ（舞台監督・助監督・大道具・誘導・司会・抽選会）：6名 大人スタッフ：10名

### 真剣に取り組む子どもたち

制作スタッフの子どもたちは、バックステージツアーから始まりました。八千代市文化・スポーツ振興財団の職員の方が作ってくださった「舞台用語集」や「舞台監督とは」などの資料を手にも市民会館の完全コンピュータ制御の最新施設になった音響と照明室や舞台裏を見て歩き、レクチャーを受けました。

本番さながら直前のリハーサルでは、舞台監督は照明や音出しのタイミング、司会は原稿を作り、読みや進行時間の確認などを財団職員の方と打ち合わせます。

職員の方々は、子どもたちに合わせることはせず真摯に向き合い、子どもの力を引き上げていきます。それに子どもたちは、緊張しながらも一生懸命応えています。ピーンと張り詰めた空気の中で真剣に取り組む制作スタッフの子どもたちの顔つきがりりしくなっていました。本物に触れるこの体験から、過去には音響を担当した子どもが、職業に選んだということもありました。当日は、ここが子ども制作スタッフの舞台となるのです。



### 【ステージプログラム】

1. L z Groove (ヒップホップダンス) 小学生 11人
2. リズムJr, ポップ・ルー (リズム体操) 幼児 9人 小学生 5人
3. レインボーキッズ (マジック) 幼児 7人 小学生 1人
4. 地球防衛隊 (ミュージカルダンス)  
(佐倉こどもステーション) 小学生 15人
5. MPキッズwithハニーちゃん (体操) 幼児 6人 小学生 6人
6. Bibookids (ビボキッズ) (ヒップホップダンス)  
小学生 10人 中学生 5人
7. やちまる組 (和太鼓) 小学生 15人
8. OWD2014 (脚本も子どもの劇) 小学生 2人 中学生 1人
9. 八千代舞夢小町(よさこいソーラン) 幼児 2人 小学生 9人
10. Cherrys (ミュージカルダンス)  
(佐倉こどもステーション) 小学生 15人
11. 響 (和太鼓) 小学生 3人 中学生 1人 高校生 1人
12. MK Hoop Kids (フラフープ) 幼児 11人 小学生 8人

### 子どもたちが作品を創造する

このフェスティバルでは、出演する子どもたちが一つの作品を創り上げていきます。その過程では、子ども同士意見がまとまらず話し合いを重ねたり、一人ひとりの子どものペースが違うことをみんなで認めたりしながら、子どもたちの力でひとつにまとまっていくのです。そこには、ハラハラしながら子どもたちを見守る大人の姿があります。

そして本番では、小さい子をそっとサポートする年上の子や、励まし声を掛け合う姿がたくさんありました。ステージでスポットライトを浴び、会場からは拍手や歓声をもらい、どの子どもも笑顔が溢れていました。成し遂げて安心した顔、失敗したけど楽しかったと嬉しそうな顔。

ファイナーレで、制作スタッフの子どもたちがステージに立ちました。堂々と挨拶する子どもたちに惜しみない拍手が送られました。

子どもたちが自己表現し、一人ひとりが輝く場となっていることに加え、地域・お稽古教室・近隣の団体とバラエティに富む出演者が揃ったことで内容も充実し、出演している子どもたちも他の出演者のステージを観ることを楽しみにするようにもなりました。また、観客も一体になって会場を盛り上げ舞台上の子どもたちに力を与えてくれます。

今後は、この姿を地域のより多くの方々に見ていただけるような工夫と努力をしていきたいと思っています。

### <子どもスタッフの声>

- ・舞台監督を引き受けた時は不安でした。リハーサルでの打ち合わせはとても大変でしたが、本番では成功させることができよかったです。皆さんに支えていただいたおかげです。
- ・舞台道具、その場で覚えなくてはいけない情報、本番と同じように通してと、さまざまなことを経験できました。
- ・本番はとっても緊張しました。しかしスタッフのみんなと会うと少し緊張はほぐれていきました。そのため本番は自分が思っている以上によい結果になったと私は思いました。また裏方やりたいと思いました。

### <出演者の声>

- ・沢山のお客さんがいて緊張して初めは声が出なかったけれど、みんなが声を出してくれたので私も出せました。  
(小3女子)
- ・ステージからお友達やたくさんの方が応援してくれるのがわかったのでうれしくなった。  
(小3男子)

(特) 子どもネット八千代 副理事長 渡辺美佐緒

### 編集後記

明けましておめでとうございます。今年もどうぞよろしく願いいたします。昨年末終了しました「ちばのWA 地域づくり基金のキャンペーン」に23店が参加していただき、また14店が募金箱を置いてくださり、「病氣と向き合う子どもが笑顔になる贈り物事業」を応援していただきありがとうございました。たくさんの方に事業のことを知っていただき、温かい応援を頂きましたことに感謝いたします。